

＜シンポジウム 22＞我が国の臨床神経学の発展のための神経内科医の経済的基盤の確立

ねらい

座長 本郷眼科・神経内科，奈良医科大学名誉教授 高柳 哲也
田村内科・神経内科医院 田村 隆治

(臨床神経 2010;50:1044)

日本神経学会は50年の経過を経て、その学術的な面では順調に経過してきているが、その観点を我が国の神経内科診療の社会的、経済的側面から眺めてみると打開すべき方策を考えなければならない点が多々みられる。とくに先進国の中で公的保険によって医療がおこなわれている我が国は国内総生産GDPに対する医療費が先進国中最低であり、また臨床医学の観点からも大きく遅れた面があって、将来に期待しなければならない改善点がめだつ。医療崩壊は神経内科診療にも大きな障害として底流している。

このシンポジウムではこれまでの検討に加えて、さらに医

療経済、今後の問題点の掘りおこしを探索して、神経内科の将来への経済的診療体制の礎を築くことがそのねらいである。この問題は神経内科医にとって急務であり、神経内科医が粘り強く心して励まねば解決しない。

すでにこの方面の検討は多くの神経内科医によってなされてきていて、多少の改善はみられてきているが充分ではなく、またその観点も限られている。多くの視点と方策によって多角的かつ積極的に対処しなければ医師の十分な環境改善は期待されず、その結果を十分に国民に還元できないこととなる。